

子どもたちの

団体活動

そこに秘められて
いる大いなる教育力

昭和音楽大学
短期大学部助教授
西村 美東士

教育とは子どもがワクワクする営み

少年団体指導者の方々が、もし、動物のしっぽの動きを子どもたちに教える場面に出会ったら、まず、どんなことをするだろうか。

「しっぽの動きの教え方」という本を探して（そんな本はないが）、その本のとおり教えればよい、と思うような主体性のない人は、指導者の中にはいないと思う。動物のしっぽについて、自分が子どもたちに何を教えたいのか、考えるだろう。現在の自分の中に教えたいことがまだできていなければ、しっぽに関するたくさん資料を集めて、「教えたいこと」を自分の中にあらたにつくり出すことだろう。

それが教育の第一歩である。こく

薄い科学絵本、一冊を作り出すため

には、手に抱えきれないほどの「大人向け」の資料が読み込まれるという。そこで作者が感動したたくさんの事実のエッセンスを、科学絵本という形で表現する。その絵本が、作者が感じたのと同じ感動（共感）を子どもに与える。そこに絵本づくりの面白味がある。

少年団体指導者の活動にも、同じような苦労と喜びがいつもついてまわっている。つまり、指導者自身に伝えたい感動があるからこそ、それを苦勞しながら補強した上で、その感動を同じ人間としての子どもたちに伝えようとしているのだ。教育の

第一歩は、「伝えたいこと」がある

ということだ。しかし、それだけでは教育にはならない。子ども自身が新鮮な驚きをもって感動しなければ、指導者だけがワクワクしていただけない。感動ということにしかない。感動を伝えるためには、子どもたちとその感動をコミュニケーションできるセンスが必要になる。教育的センスといつてもよい。

ここに「しっぽのはたらし」という絵本がある。中を開くと、たとえ

ば、
ふわふわとした しっぽを、ひ
よい ひよい ふりながら、えだ



のうえを すばしく はしりま
わったり、えだからえだへ、とび
うつたりしています。なんの
しつぽでしょう？

とあって、ページの右上に木の枝に
つまった小動物のしつぽのあたり
が描かれている。よく調べられて正
確に描かれているが、思わず微笑ん
でしまうほど可愛らしくもある。ペ
ージをめくると、それは、りすの体
全体につながっており、他の一匹は
しつぽを広げて枝から飛び降りてい
るところだ。「ふわふわした」しつ

少年団体活動とは子どもたちの「準拠枠」に迫っていく活動

ひとがものごとをとらえる時の枠
組みを「準拠枠」という。「カウ
ンセリング」という本によれば、次の
とおりである。

人間は、言葉を使って、さまざま
な考え方や複雑な感情を表現す
ることができ、それらのこと
を表現したり、お互いに理解しあ
つたりするためには、その拠りど
ころとなるものが必要である。そ
れを「準拠枠」と考えればよい。
(中略) 例えば、同じ「悲しい」
という言葉を使って語をしても、
突きつめていくと自分の「悲し
い」と相手の「悲しい」が違つて
いうことに気づくことがある。私

ばが ばらしゅーとの やくめをす
る」というのである。

たとえば、りすのしつぽがバラシェ
ートになることを知って作者がワク
ワクしたとしても、それを前のペー
ジに書いてしまったら、おしつけが
ましいし、子どもたちに作者の感動
が伝わるようなものにならなかつた
だろう。子どもが「何のしつぽだろ
う」「何のためにあるんだらう」と
自分で思つてこそ、真実を知らされ
て驚き、ワクワクすることができ
るのである。

たちの日常生活は厳密にいうと、
実はそのようなことのくり返しだ
といつても過言ではない。

そういうすれ違いがあつても、平
気で大人の準拠枠を押しつけるだけ
の団体運営を進めるならば、それは
表面的には団体活動に見えても、け
つして教育的な活動とはいえない。

現代社会では、本当にひどい本が
売られている。ある本には「女性の
部屋に侵入する方法」などがびっし
り載っている。「相手が一人暮らしか
どうかを確認すること」から始まっ
て、「窓ガラスに粘着テープを貼っ
て焼き切つて、手を入れて鍵を開け
て侵入」する方法やクロロホルムで

団体が子どもたちに伝えたいこと
を持つているということは、少年団
体活動が教育的意義をもつための基
本的条件にはなるが、それを子ども
たちにお説教するだけなら、そんな
ものは何回繰り返しても本当の教育
にはならない。子ども自身が自分で
ワクワクしてこそ、子どもは確かな
成長をするのである。教育的セン
スさえあれば、少年団体活動は、そ
ういう「ワクワク」を与えるワンダー
ランド(不思議の国)の「局面」を
本質的になくさんもっている。

眠らせる方法などがいていねいに書か
れている。高校生
あたりになるとそ
れはどでもないら
しいが、中学生が
よく買っていくと
のこと、またた
く間に版を重ねて
いる。子どもたち
が異性を見る目は、
その準拠枠は、こ
の先、どうなつて
いくのだろうか。

あるいは、そこま
で極端ではなくて
も、たとえば従来

の競争社会が生んだ受験体制の圧迫
は、ほとんどの子どもたちの準拠枠
の形成に大変な影響を与えている。
「偏差値君さようなら」という生涯
学習社会の理念からは、まだほど遠
い実態なのだ。

こういう環境に影響を受けてしまっ
ている今の子どもたちの準拠枠のずつ
と遠くの方で、きれいなことばかりで
埋めつくされたお説教をしていても、
子どもたちは情報の一つとして聞か
れることはあつても、子どもたちの
準拠枠そのものには響かない。

かつては、パブロフの犬がベルを
鳴らせばだれを流したように、子
どもにどういう「刺激」を与えれば
大人にとって望ましい「反応」をす



写真提供：日本海洋少年団連盟

ようになるか、ということばかり追及することが教育の姿のように考えられていたこともある。現在の少年団体指導者の中にも、忙しさのあまり、そういう傾向に流れてしまっている人がいるかもしれない。しかし、本当の教育の姿は、そこにはない。それぞれの子どもたちの「嬉しい」「悲しい」という気持ちがある

少年団体活動には教育力があふれていゝ

【体験のもつ教育力】

国立日高少年自然の家の記事では、集団宿泊活動の中で子どもたちの体験活動を、①人への働きかけ ②自然への働きかけ ③地域文化への働きかけ ④公共施設への働きかけ ⑤その他、に分けて検討している。また、「なかもたち」15号で三浦清一郎氏は、子どもたちがもっている自然に関する知識について次のように述べている。

これらの子どもが知っているのはいわゆる「解説」であって、実際の自然の在り様についてはほとんど経験していないし、知識もなにもに驚くのである。（中略）このような状態を青少年の自然接触体験の欠損と呼んでいる。そして、三浦氏は、ある体験が子

いがしろにされているのは教育は始まらない。

しかし、本来の少年団体活動なら、子ども達の準備そのものに迫っていくことができるはずだ。なぜなら、活動の中には、感動を呼び起こす参加や体験があって、感動を共有できる子ども達が集まって、それらを受け止める地域があるからである。

どもに欠如しているということは、子ども達の「社会化」（社会のメンバーとしてふさわしい資質や行動の仕方）を子どもたちに教えていくプロセスであり、少年期にはその大部分が体験を通して獲得される」が行われないということの意味している、と指摘している。

【参画のもつ教育力】

全国子ども会連合会の資料には、「おしきせプログラムはまっぴら」と題して、次のように書かれている。どうも、大人が事前にすべてを準備しきって、ただ子どもは、お客さまで参加するという行事が多かったのではないかと。プログラム立案の段階から参画することは、参加意識を高め、苦勞しても、なんとかやりとげ成功させたい、そ

のために労をおしき仲間と協力しあおうとするであろう。その仲間と苦勞をともにして、やっと仕事をなしたあとの成就感を味わったとき、ヤツタという晴れ晴れした気持ちになるであろうし、その時「またやってみよう」というやる気を育てるわけである。

参画は、ひとをワクワクさせる、参画するためには、そのひとは主体的にならざるをえず、自分自身の準備にも鋭く迫られる。そういうせつかつのチャンスが指導者が独り占めにするならば、指導者だけが「成長」するという結果にならぬ。

【地域活動のもつ教育力】

創造性開発理論の中に「異質馴化と馴質異化」という考え方がある。異質なもの（を身近な馴れたもののよう）に眺め、馴れたものを新たな気持ちで見直すという意味であろう。

住みなれた地域には、「空缶拾い」や「花いっぱい」などのいわば「馴」のレベルの素材がいっぱいころがっている。これはこれで、子どもたちに素晴らしい体験のチャンスを与えてくれる。しかし、その教育的効果はもともと興行きの深いものとして認識され、広がりのある活動がなされるべきである。いつもの地域を地球の一部を他の天体から見ようという



持ちで、つまり「異」のレベルで、見直してみると、地球の限りある資源を大切に使用してもらうために小さなコミュニティが果たすことのできる大きな役割も見えてくるのではない。

子どもたちにとって、地球は、主人公として参加できる身近な場所であると同時に、少年団体の教育的センスによつては、壮大な夢と認識を広げてくれる場にもなるのである。

【仲間集団や異年齢集団のもつ教育力】

少年団体活動の中では、同世代の仲間や義理の兄弟姉妹との関係が、自然に数多く発生する。子どもたち

